

1 学校の状況と地域の実態

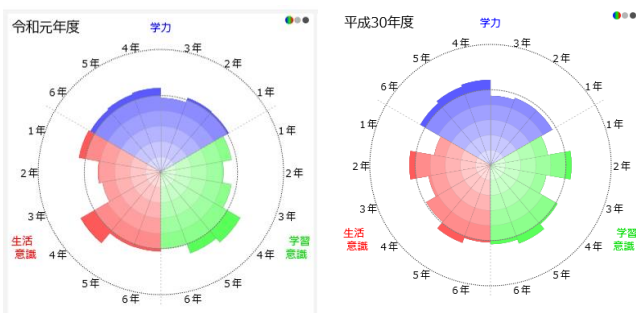
- (1) 一昨年度まで取り組んだ算数科の授業研究を中心とした研究・研修は定着してきている。学校としてどのような授業をめざしていくのかという部分についての共通理解ができてきている。
- (2) 授業をわかりやすいと感じている児童とそうでない児童との意識の差、学力の差が大きい。「総合的な学習の時間」「生活科」など自分で問題意識をもって進められる学習に多くの児童が楽しみながら取り組んでいる。
- (3) 地域の教育力を生かした読み聞かせ活動があり、どの学年も読書への関心が高まってきている。
- (4) 体育学習への意欲の高さ、体力向上の取組（いきいきタイム）などから、運動への関心は全体的には高いが、1日の運動量が十分とは言えない児童もいる。
- (5) 学年が上がるに従って自己肯定感が高くなってきている。また、挨拶についても意識が高く、多くの児童が友達や家族と良好な関係を築くことができていると考えられる。

2 3年間の方向（中期学校経営方針）

学力向上に関する指導の目標・方針（令和3年度末の姿）

- 人、社会、未来とのつながりを大切に子どもを育てます。
 - ・多様な人と学ぶ中から、人権意識の高い子どもを育てます。
 - ・意欲的に取り組む学びを通して自分の生き方を考え、持続可能な社会づくりを意識できる子を育てます。
 - ・地域で活動する人の姿から学び、地域とのつながりを大切に子どもを育てます。
 - ・子どもたちの学びの充実のために、学校・家庭・地域で教育活動について見直します。

3 横浜市学力学習状況調査等からの実態把握（令和元年度より）



(1) 学力の概要と要因の分析

全体的には、横浜市の平均的な学力であるが、高学年は、市平均よりやや上回っている。生活意識や学習意識は、学年によってばらつきが見られるが、意識の高さと学力が比例している状況にある。生活意識では、「授業で自分の考えを發表しているか」「1日の読書時間は」という設問で、全学年が、市平均よりも上回っている。

(2) 教科学習の状況

- 国語科：全体的に「読む」「書く」が市の平均を上回っている。
- 社会科：学年によって差はあるが、全体的にどの観点も、市の平均を上回っている。
- 算数科：「数学的な考え方」は、どの学年も市の平均を上回っている。
- 理科：全体的に市の平均を上回っている。「知識・理解」は特に大きく上回る。

(3) 経年変化の状況と要因の分析（学習・生活意識調査も含めて分析）

平成29年度から令和元年度までの過去3年間の経年変化の状況を見ると、全体的に、どの教科もほぼ平均値に近いところで、変化はしていないが、高学年は、常に市の平均よりも上回っている。学習意識では、「〇〇科の勉強が好き」「〇〇科の勉強は大切」については、児童の意識は高くなってきていて、「自ら学ぶ」という児童の姿に表れてきていると考えられる。「自分の考えを發表していますか」については、どの学年も、少しずつ増えてきている。

このように、経年変化の状況から、昨年同様、自分の考えを根拠をもとにノートに書き表したり、学びから気付いたことをまとめたりする活動を大切にしながら、子ども一人ひとりの思考力・表現力を高めていく授業づくりを行う必要がある。

4 令和3年度 目標と具体的方策

浦島小学校のGIGA スクール構想の実現に向けて ～タブレット端末環境を活かした授業づくり～

(1) 学校組織としての共通の取組

○研修・研究会の時間の確保と内容の充実

研究授業、学年内での事前授業、初任者育成のメンターチームを組織し互いに高め合う研修等を行う。重点研究においては、①タブレット自体の使用方法 ②ロイロノートやGoogle Workspace の使用方法 ③授業での効果的な利用方法 ④特活や委員会などでの効果的な利用方法 の知見をためることを目的とし、全職員で取り組む。

○特別支援教育の充実

自閉症等にかかわる研修会（年2回）の実施や、月1回の職員会議での「児童についての共通理解を図る情報共有の時間」の実施を通して、一人ひとりの児童理解の充実を図り、その子に合った支援ができるようにする。

(2) 学年・教科等としての取組

1学年

- 子どものこれまでの経験や、「やってみたい」という思いに寄り添った学習活動を通し、意欲を連続・発展させて主体的に取り組んだり、自分の思いや考えを表現したりすることができるようにする。
- 学校や地域とのかかわりを通し、コミュニケーション能力（話すこと聞くこと）やルール・マナーなどを身に付けることができるようにする。
- 上記2点を踏まえ、自分ができるようになったことや自分のよさ、可能性に気付くことができるようにし、子どもたち一人ひとりの意欲や自信をもって生活することができるようにする。

2学年

- 国語以外の場面でも、相手や目的に合わせて話すだけでなく、書く場面を増やすことを多く取り入れる。また、相手に伝えるための情報を正しく読み取る力をつけられるようにする。
- 数の関係性や規則性を言葉で表すことができるように、応用問題に取り組む学習の計画を立てるようにする。

3学年

- 国語の書く場面では、漢字や助詞などを正しく書けるよう指導していく。「話す・聞く」の学力は全ての学習に繋がるため、引き続き考えを伝えたり聞いたりする学習を大切にしている。
- 算数では、全ての児童が「算数の授業が分かる」と答えられるように、引き続き自分の考えを絵や式や言葉を使って説明する場面を増やし、理解を深める学習を大切にする。

4学年

- 自分の考えを相手に伝えるように表現したり、相手の話を聞いたりしながら学習を深める機会を意図的に設け、「話す・聞く」力をつけていく。
- 学習した基礎・基本の事項を生かして、問題を解いたり、生活と結び付けたりする時間を増やし、技能や知識を活用する力をつける。
- 思考したことを言葉・式・図などで表現し、それらを基に意見を交わし合うことで、思考力を高める。

5学年

- 学習場面全体で、自分の考えをもつことは多くの子ができていため、友達の考えを受けて、さらに思考する場面を設定する。
- 問題が解決できていないときに、自分から聞きに行く場面を設定し、子どもが安心して学べるようにする。
- 学ぶ意欲は全体的に高まっているため、考えを伝え合ったり、ノートにまとめたりする活動を継続していく。

6学年

- 文章を書く場面を意図的に位置づけ、教科等の学習で自分の考えを表現する力を高められるようにする。
- 相手に伝えるように筋道立てて話したり、相手の意図を考えながら聞いたりできるように、話合いの論点に沿って、自分の考えを伝え合う場を設定する。
- 理科では、技能の定着を図るために、体験的な学習を充実させる。

個別支援学級

- 個別の教育支援計画・個別の指導計画に基づき、話し言葉、表情、仕草、書き言葉等、発達段階に応じた適切なコミュニケーション手段を積極的に活用する場面を位置付ける。
- 子どもの発達段階に応じて、各学年の取組を参考にし、必要な取組を行う。
- 子どもたちとの関わりを通し、コミュニケーション能力を高める活動を行う。